



第140号(2009)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：森下弘 館長：ロン&バーブ・サイニィ

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>

ピースキャンプでの交流を終えて

懸川萌

今回のピースキャンプでは、一日のうち約半分くらいを使って、中国や韓国の子と平和はどのようなものか、体を使って表現し自分の意見を述べる機会がありました。その中で私が特に印象に残っているのは、『争い conflict』をテーマにグループで発表したときのことです。私のグループには、韓国の子が二人いました。そのうちの一人の女の子が、発表の内容の中に『Japan Vs South Korea』と書いていました。私はそれを見たときに悲しいなと思いました。私たち日本人は中国と韓国の人から見ると、いまだにそういう対象として見えるのだと思うと切なく感じました。



写真：前列(左一右):Hajim, Yeram, 懸川明貢, Hyo-un, 懸川萌, 坂田悠綺, 森嶋かりん, Yejin, Wang Ying、
2列(左一右):Victoria, Vicky, Michelle, Claire, Dinah, 田丸和枝, Eileen
3列(左一右):Karen, Jim Ronald, Inhye, Allen, Yoonseo, 看護婦さん、4列(左一右):Domin, Van Diesel,
Brother Song, Wise, Eric, Mark、後列(左一右):Janice, Kim 先生、Johnson, Krishna Somanah

しかし、心温まる体験もしました。それは、平和学習の最後のときに、一人のアメリカ人が、日本人である私たちに謝ってきたことです。（原爆について）そのアメリカ人も、私たちも、直接戦争の時代を経験しているわけではないのですが、やはり、その国の代表として行ったので、大切なことだなと思ったし、私たちもホッとするようなうれしいような、気持ちになりました。そして、そこでやっと韓国の子や中国の子の気持ちがわかったような気がして、謝らないといけないと考えられるようになりました。

多くの中国人は、やはりまだ日本人に抵抗があると言っていました。しかし、私は少なからず今回の旅行で仲良くなった子は今の日本や、今の日本人をわかってくれたのではないかなと思います。私もまた、旅行に行く前と後では中国人や韓国人に対しての偏見がなくなりました。

楽しかったのは、毎日あった自由時間でした。この自由時間でたくさんの友達が作れました。あまり英語で話のできない私も、2、3日したらすっかり仲良くなれました。手振り、身振りや、「伝えたい」「仲良くなりたい」という気持ちがあれば仲良くなれるということ、身をもって体験できました。今では、仲良くなった子たちとたくさんメールをしています。貴重な体験ができました。本当にありがとうございました。英語をしっかりと勉強して、いつかまた中国や韓国の子にもう一度会えたらなと思います。



(写真：野外にて)



(写真：持って行った甚平を着て)

中国ピースキャンプ

坂田悠綺

わたしは中国に行く前、ちゃんと受け入れてもらえるかどうか不安でした。平和交流ということで、日本が戦時中に韓国や中国にしてきたことをどう捉えているのか、そのことを責められてしまうのではないのかと思っていたからです。

しかし、中国に行って、韓国の人も中国の人もすごく私たちに親身になってくれました。グループ割りで私のグループは日本人が私一人しかいなくて不安だったときも、声をかけてくれて、すごく助かりました。部屋でも、日本についてすごく興味があったらしく、いろいろ聞いてくれましたし、中国についてもいろいろ教えてくれました。自由時間は、韓国人の子に韓国語を教えてもらったり、日本語を教えたりしましたし、卓球をしたりバドミントンをしていました。韓国人の子は、私たちと同じように英語がすごく得意というわけではなかったので、自分の言語や英語を混ぜて話していました。でも、お互いちゃんと理解できていました。

午前中のアクティビティーでは、高い木と木の間をジャンプしたり、リペリングをしたりもしました。みんなに日本語で「頑張れ!」と励ましてもらって勇気が出ましたし、チャレンジした後は、達成感がありました。グループやペアで力を合わせて綱渡り、ターザンロープ、綱くぐりは、どうすればいいのか考えて、みんなとしっかり話し合っただけでやらないとうまくいかないことがよくわかりました。最初は、これが平和とどう関係しているのかよくわからなかったけれど、みんなに意見を主張して話し合いながら乗り越えていくことも平和の一つなのだと思いました。

午後は、平和に関するテーマについてみんなで創作をしました。なにか問題が起こった時、どうすればよかったのかディスカッションをしたり、絵を描いてみたり、曲を作ったり…やはり日本とは違った価値観があって、中国の人はすごく積極的だったりするので、驚きました。でも、見習うべきところだと思いました。

カルチャーナイトは、どの国の人たちもしっかり準備していて、文化も歴史も知ることができたので、日本ももう少し準備していれば良かったと思いました。タレントショーでは、私は詩の朗読をしました。最初は、広島悲劇を伝えたい思いと、日本がしてしまったことに対する罪悪感があって、どうなるのか不安でした。しかし、みんな最後までちゃんと聞いてくれて、感動して感想まで言ってくれる人もいたので、やって良かったと思いました。

最終日は、Michael Jackson の “Heal the world” を聞いたり、キャンドルナイトをしたりしました。最初は不安だったけど、実際いい人たちがばかりで、ちゃんと受け入れてくれたこと、すごくみんなに感謝しています。むしろ別れが寂しいほどでした。みんなで泣きながら別れを惜しんで抱き合った感触を今でも覚えていますし、“Heal the world” を聞くとみんなにとっても会いたくなります。

中国での体験は初めてが多くて、その分不安も大きかったですが、すごく楽しかったですし、勉強になりました。私はこの旅での経験を忘れないと思いますし、もっと他の場所でもいかしていけたらと思っています。

ピースキャンプ

森嶋かりん

「中国」のイメージを友達に聞くと、「きたない」、「貧しい」、「物価が激安」と言われる。実際に、私が中国に行くまえのイメージもそうだった。とにかく、中国に関して、良いイメージはほとんど持っていなかった。そんな風に思いながら、私は中国へ行った。

上海では中国人がたくさんいて、ほとんどの人が日本ではまず、考えられないようなことをしていた。例えば、ありえないほど大きな声でしゃべる。そこらへんにつばをはく。などなど。キャンプでもこんな人が来たら、私はどうやって付き合えばいいのかと、とても不安になった。

中国に着いた日の夜に、町を歩いたら、イメージどおり貧しそうなのが路上で物を売っていたし、物も日本では考えられない安さだった。そんな驚きの夜が明け、朝、韓国の生徒やカナダ人、アメリカ人と合流した。カナダ人やアメリカ人とは、話しなれていたし、英語も発音がよくて、聞き取りやすかったので、すぐになじめた。バスの中でも、いろんな話しが出来た。

パンダセンターにも行き、中国の良い所もみつけた。しかし、キャンプ場に行く途中でバスが壊れたりもした。日本製の車は壊れることがほとんどないので、びっくりした。その時は、バスの外、つまり車が走る道路の隣で待たされた。本当にありえないと思った。でも、日本ではまずこんなことはない。こんなときはパニックたりせず、冷静にしなければならぬ。良い経験をしたと後から思った。

その夜、予定よりもだいぶ遅れてキャンプ場に着いたとき、中国人の生徒と合流した。思っていたよりもみんな普通だった。同じ部屋の人とはすぐに仲良くなれた。あまり英語が上手ではなかったけれど、優しく、日本のことをかなり知っていたので驚いた。しかし、それ以上におどろいたことはたくさんあった。部屋だ。シャワーとトイレと洗面所が同じところにあった。そして窓。とてもかたむいていて虫がたくさん入ってくる。そして水。トイレから出る水も、シャワーの水も両方茶色かった。その夜は、あまりのきたなさに驚き、早く、日本へ帰りたいたいと泣いた。あらためて日本が清潔だということに気付かされた。

そんな今まで過ごしたことの無い最悪な夜が過ぎ、ハイキングへ行った。中国人カウンセラーは、安全なところへしか行かないと話していた。そんな言葉を信じた私は本物のバカだった。山の中は今にも蛇が出そうだった。それに前の夜が雨だったので、とても滑りやすかった。実際、私は2回すべった。また、ありえないほど急でツルツルしてみるからに危険な階段を上ったり降りたりした。もうこんなところへは来ないと心の底から誓った瞬間だった。手をさし伸べてくれる人もいたが、私は中国に腹がたっていたので、それを受けとめることは出来なかった。日本へ帰りたいたいという思いが増す一方で、その日、ベッドにカビが生えていて、本当に死にたい気分だった。その日も、次の日もみんなで集まって、ダラダラ、つまらない歌や踊りをした。こんなことならもう幼稚園でさんざんやりました、という感じだった。

中国人の生徒は、結構強引で遠慮もまったくなかったため、私以外の日本人生徒は少し引いていた。でも彼らは、日本人にとっても気を使っていた。私たちが、中国人にいろいろなイメージを持っているのと同じで、中国人は私たち日本人にもいろいろなイメージを持っていた。例えば「お金をたくさん持っている」、「差別をする」、「中国人のことをあまりよく思っていない」など。そう思っていたため、私たちにいろいろな気遣いをしてくれた。しかし、それが日本人にとって「ん？」と思えたのかもしれない。でも、中国人10人に対して日本人、私1人の夜を過ごしたこともある。それも、それでよかった。中国のことや中国人のことを知ることができたからだ。

韓国人の生徒はとにかく面白かった。本当に笑いの絶えない人たちばかりだった。実際に私は韓国人の生徒と過ごした時間のほうが多いと思う。しかし、韓国の生徒はみんな面白くて、楽しかったが、自分たちの文化の話はしてくれなかった。しかし、韓国人は、中国人以上に日本のことを知っていて、日本に来たい、あるいは来たことがある人が多かった。韓国人とは、「花より男子」や韓国ドラマなどの話でもりあがった。このような人たちに囲まれていることに気付いたとき、中国もそんな悪いところではないと思った。

そして、キャンプ場を出る2日前の夜、国ごとに出し物をした。私たちは「あおぎりの歌」を歌い、おりづるを配り、折り方を教えた。その後は、みんなで写真をとった。最後の夜はみんな泣いていた。部屋を暗くして、ろうそくで部屋を明るくした。そして世界地図の上に自分の好きな場所にろうそくを置いた。私は日本、韓国、中国の間に置いた。そうしている人も多かった。その後は故マイケル・ジャクソンの歌とDVを見た。「Heal the World」は、平和とはいえない世界を平和にしようと呼びかけている曲だ。これを聴いてドッと涙があふれている人もいた。私はみんなの純粋な心に感動した。実際、私は泣かなかったが、心の中では感動の涙ともらい涙が流れていた。その夜、みんなが、どんな思いでこのキャンプに参加したのかよくわかった。

出発のときは、少し寂しかった。中国人は、とても優しく、思いやりのある人ばかりだった。そんな友達と離れるのは辛かったけれど、お礼を言って、メールすると約束して別れた。韓国の人とは、空港で別れた。楽しくて、笑いのたえなかった韓国の人と別れるのも、少し辛かった。韓国の人とは、日本へ絶対に来るようにと言って別れた。

中国を離れ、日本へ着いたとき、ピースキャンプで学んだことを考えてみた。第一に、人種はちがっても関係ないということ。次に、外国人のことを自分のイメージどおりに決め付けてはいけないということ。そして、平和に触れるということはとても大切だということ。まだまだ学んだことや考えたことはたくさんあるが、これが主な3つだ。日本人は、中国や韓国について、悪いイメージを持っていたかもしれない。でも、勝手に決めつけてはいけない。私も中国や中国人にいいイメージを持っていなかった。行ってみても、中国はあまり自分に合わなかった。でも、中国人はとてもいい人ばかりだった。韓国人にしてもそうだ。その人たちを知ってから、印象を決めるのはとても大切なことだと思う。これからも、中国人や韓国人だけでなく、いろいろな国の人と友情をつないでいきたいと思う。

ピースキャンプに行って

懸川明貢

(写真：懸川明貢)

ぼくはこのキャンプで、平和の大切さがわかりました。平和のお陰で今回のような機会が持てたのだと思います。ただ平和学習の時間は英語での会話なので、ほとんどわからなかったです。もっと英語を勉強してあげればよかったと感じています。でも中国や韓国の友達とは言葉は通じなくても、身振り手振りで会話することができました。卓球で盛り上がり、とても楽しかったです。友達が出来て今ではメールのやり取りもしています。また、次のチャンスがあれば是非参加したいです。



ピースキャンプ報告書

ジム・ロナルド

2009年7月25日(日)ピースキャンプのための長い準備は終わり、ついにキャンプが開始した。広島から7人(中学生2名、高校生2名、カウンセラー2名、コーディネーター1名)はキャンプに旅立った。その日の朝、土砂崩れで高速道路が通行止めとなりバスの運行がストップした。父兄のご好意で広島空港まで車に便乗させてもらい、上海行きの便に運よく間に合った。(その便は1時間以上遅れての出発だった。)四川省成都への連絡はスムーズに運び、中国人コーディネーターのWang YingとカウンセラーのEileenの出迎えでホテルに案内された。町をぶらつこうとちょっと外出したのが午後10時ごろであったが家々の戸は閉まり雨も降っていたので、休むためにホテルに帰った。韓国チーム(大人4名、12歳から16歳の生徒5名)が到着したのは午後11:30頃だった。

翌日ホテルで早い朝食を取り、雨の中四川省パンダリサーチセンターに向かった。パンダがいた。たくさんのパンダを見た人もいたし、あまり見られなかった人もいた。パンダは雨も、見られるのも苦手のような感じだった。それでも私たちはみんな、この先、生きていくうちに見る以上のパンダを見た。

この後、近くのレストランに行き、忘れられない成都料理のごちそう(10種類の料理でその多くは香辛料が効いたものだった)をいただいた。これに続いて二度としたくない別の忘れられない体験をした。——トイレに行った。一人の生徒は、「家に帰りたい。」と半分冗談半分本気で、私に懇願した。ありがたいことに、旅行中のその後のトイレ体験はずっとまじだった。

それから、3時間バスに乗り北東の南充に向かった。途中バスが動かなくなり、代わりのバスに乗り換えたため2時間余分にかかった。しかし、その間、私たちは自己紹介をしたり歌を歌ったりした。恥ずかしがりやの日本人生徒たち、そして恥ずかしがりやのカウンセラーにとっては楽しかったが、大変でもあった。

南充で9名の14歳から17歳の中国人参加者が合流した。物静かで英語に自信なさそうな生徒もいたが、上手な英語をしゃべり、英語を話す機会を得て喜んでいる子もいた。クリシュナと私が話した4名は自分たちの生活のこと(朝7時から夜10時までの学校生活)、夢(通訳になること、俳優になること・・・)それと日本についての意見を語ってくれた。その中の一人は、「英語は好きなんだけど、本当は日本語を学ぶことに興味を持っている。そしてすでに、日本語の文章を少し覚えた。」と言った。また別の子は「キャンプに参加することには興味があったが、日本人も参加すると聞いて躊躇した。」と話してくれた。その子は戦前、戦時中に日本人が中国人に対して行った行為のことを知っていて、適切な謝罪

や補償もなかったし日本の歴史教科書は真実を伝えていない、と言っていた。学校では日本とドイツの戦後処理の比較学習をしていて、どういう状況だったのか学んでいた。我々に言えることは多くはなかったが、そのことはこのピースキャンプが行われる必要性を確信させるものだった。

さらに 45 分バスに乗り Jinshen (?) 山地に到着した。雨あしは激しく暗かったが、そのおかげで体には十分感じたが、山道がどれだけ曲がりくねっていて険しかったか見ずにすんだ。キャンプ地に近づいたところで、バスが曲がれないカーブがあった。我々は全員バスを降りて暗がりの雨の中を 15 分歩いた。持ってきた懐中電灯と傘をみんなが使って、とても役に立った。

キャンプ場はとても印象的な山小屋で、中庭（鶏が 2, 3 羽いた）の周りにメインミーティングルームがあり、ベッドルーム（バス・トイレ付きで豪華だった）のある 3, 4 階建ての翼が張り出していた。部屋は異なる国籍の生徒 2 名ずつに割り当てられた。夕食が食堂に準備され、4 つの大きな円卓に料理が並べられていた。キャンプ当初、参加者たちは同じ国の者同士が固まっていたが、時間がたつにつれて子どもたちはうちとけていった。カウンセラー用のテーブルというものはあったが、時に私たちはテーブルについている子供たちの中に入って座った。四川料理が多かったが、それほど辛いものではなかった。6～8 品のうち 2 品ぐらいはスパイスが効いていた。カウンセラーのミーティングは毎晩行われた。主に、その日の活動の反省と翌日の活動の説明、そのための役割を決めた。この最初のミーティングで参加生徒を 1 週目のキャンプ活動のために、3 つの年齢別グループに分けた。これはピースキャンプであり英語キャンプではないことを心がけ、このキャンプの目的を最大限に達成しできるだけ妨げとならない限り各国の言語は使用しても良いことにした。

7月 27 日（火）から 29 日（木）まで、朝に野外活動を行った。これは Wang Ying のご主人、Duen 担当で、生徒たちは互いに信頼し恐怖（たとえば高さの恐怖）を克服することを学ぶよう計画されていた。“Broken Bridge”、または“崖降り”のような活動に一人一人挑戦した。この順番を待っている時間は生徒たちがいっしょに話しをする良い機会となった。午後のセッションは平和に関するテーマを中心に行われた。初日：平和と対立。2 日目：コミュニケーション。3 日目：相互尊重（または人権）。それぞれのセッションは、カウンセラーまたは生徒がキーコンセプトとキーワードを紹介することから始まった。キャンプを通じて私たちはだんだん上手になった。それから 3 つの年齢別グループに分かれ、活動を行った。その内容は、平和のシンボルを使って絵を作り説明する、寸劇や歌を作る、平和に関する活動の報告を聞いてその関連問題を話し合う、など。これらはすべてがうまくいったわけではない。理解が困難だったり、自分の言いたいことが伝わらなくてフラストレ

ーションを感じたり、思い切ってやってみようとする力に差があったり……。キャンプが進行するにつれて、カウンセラーも生徒も慣れてきて、言葉に頼ることを控えたり、必要に応じてもっと言葉をサポートしたりした。

水曜日の夜、カルチャーナイトと称して各々の国の参加者がそれぞれのパフォーマンスを披露した。中国チームによる **Mulan** と歌、韓国チームによる **Tae Kwan Do**、伝統舞踊と太鼓、日本チームによる歌とグループになっての折鶴の折り方の伝授、北アメリカカウンセラーチームによるダンスなどである。

木曜日の夜、坂田悠綺さんが感動的な原爆の詩を朗読し、許しを表した。中国人生徒、**Linda**、は発表の用意をしていた。彼女は日本人が過去に中国の人々に対して行ったことに対して彼女が抱いていた苦痛、憎しみについて述べた。そしてさらに、このキャンプを通じてその感情がどう変わったか、今その感情がなくなり、代わりに日本人の友達ができると述べていると述べた。日本人生徒も立って日本が行った行為に対するすまない気持ち、韓国人と中国人参加者から自分たちが受け入れてもらえないのではないかという不安、それからみんなの親切や暖かさへの感謝とほっとした気持ちを述べた。私たちは大きな世界地図を囲んで座り一人一人がキャンドルに火をともし、平和への祈りをこめて地図の上にキャンドルを置いて、その夜を締めくくった。（多くの生徒はその夜遅くまで話をしながら起きていた。）中国、日本、韓国がある場所は平和への願いとキャンドルの明かりで特に明るく照らされていた。

最後の日、荷造りをし、朝食を食べ早く出発して成都まで順調に帰った。南充で中国の友達に「さようなら」を言い、成都空港で韓国の友達と別れた。上海空港で一夜を過ごし無事に広島へ帰ってきた。

このピースキャンプを支援してくださり、成功に導いてくださった全ての人に心から感謝いたします。今私に言えることは、このキャンプは行う価値があり、そして継続する価値があるということです。



写真：前列(左一右)Choi, Karen, Yoonseo, Janice, Inhye, Johnson, Wang Ying, 看護婦さん
2列(左一右):Kim 先生,Holly, Mark, Eric,Krishna, Wise, Brother Song, Eileen,田丸和枝
後列: Jim

2009年8月中国ピースキャンプの報告

ピースキャンプの目的は達成されたか？

クリシュナ・ソマナ

中国でのピースキャンプは全体として大変成功したと思う。最終日に参加者全員（生徒も進行係も）が忘れがたい体験をしたという点で意見が一致した。

ピースキャンプを実施した目的は、中国・日本・韓国の生徒たちに、友情と協力の精神を持ってともに活動する機会を与えることだった。友情の絆がこの三カ国の生徒の間で深まり、もし次回のピースキャンプがあれば、このキャンプの成果が将来のために役立つことをみんな望んでいた。

その点に関して目的は十分果たされた。参加者は全ての(身体を使う、思考を使う)活動で、チームとして行動する機会を得た。個人で行う活動(梯子登りのように)では参加者は互いに励ましあい、1つのチームとしてまとまると実感できた。

午後の活動は、平和構築に関するきちんと組織化されたプログラムで、生徒たちは尊敬と友情の気持ちを持って進行係と接することが出来た。そしてそれ自体私たちにとってとても有意義な体験だった。キャンプの初日、三カ国の生徒たちは進んで互いに交わろうとしなかった（おそらく言葉と歴史的背景のために）。しかし交わる時間が多くなるにつれ、みんな友達となり最終日には全員キャンプが終わるのを残念がっていた。

私が最もピースキャンプをやってよかったと思った瞬間は、最終日の夜に訪れた。その夜参加者は全員自分自身の意見を述べる機会を与えられ、キャンプについて言いたいことを発表した。中国の生徒たちは長いメッセージを読み上げた。自分たちの日本に対する気持ちはまったく変わり、戦争中に起こった出来事がどんなことであろうと寛容と許しの精神を持たなければならないと述べた。これは全てを物語っていた。というのも、過去に戦争を行った国の生徒たちがこのキャンプに集まることで、もしかれらが、そこで受け取ったメッセージを自分たちの国で広めるなら彼らの未来はもっと明るくなるだろうと感じたからだ。進行係の立場から見て、このピースキャンプは私たち全員に貴重な経験を与えてくれた。ともに働き、互いの文化を知ることが出来た。この活動は毎年行うべきで、将来もっと多くの参加者をキャンプに送るべきだと私は思う。

My Peace Camp in China

田丸和枝

2009年7月25日、私は中国を訪れた。正直言うと、私は中国という国に対して良いイメージを持ってなかった。ではなぜこのキャンプに参加したかという、そのイメージを払拭したいという思いがあったからだ。また、日中韓の中高生たちの交流する姿をみたいという思いもあった。そのような思いを持ちながら、私はこのキャンプに参加した。

中国に降り立ったとき、街並み、人の様子、などの違いが次々に飛び込んできた。次の日にキャンプサイトへ向かう際にも日本では見られないような光景がたくさんあった。キャンプサイトへ向かう途中、パンダセンターに立ち寄った。予想以上に素早く動き柔軟な体をしているパンダにとっても驚いた。キャンプサイトへ着くまでの道のりは長かった。バスが故障したり、夜に近づくにつれて霧が濃くなったりして、なかなかたどり着けなかった。しかし、中国、韓国のスタッフのみんなの明るさがその場の空気を和ませてくれた。

キャンプサイトの宿泊施設は中国らしさがあふれた建物だった。キャンプサイトへたどり着いた次の日から **Peace Camp** が始まった。主に、そこでは、午前中が外での活動、午後からは室内で平和に関する活動を行った。はじめは私自身どのようなことをするのか分からないまま活動が始まっていった。日本ではしたことのない活動もあったし、みんなで歌を歌ったりするのも何年ぶりだろうかというような状況であった。

外での活動は、日本ではなかなか出来ないような活動であった。特に3日目、4日目の板から板へ飛び移る活動と崖を降りる活動はテレビでしか見たことのないものだった。高い所が苦手な私はそれらに挑戦するのが恐ろしかったが、楽しさも十分にあった。

自分が思っている以上に出来ることはたくさんあるのだと感じた。活動中は「ja-yo（中国語で頑張れ）」「highting（韓国語で頑張れ）」などの言葉が行きかっていた。Wang Yingが「この活動をすることで自信がつき、いざという時の役に立つ」と言ってみんなに勧めていたが、そのWang Ying自身は「私は無理だから…」と言って目をそらしていたのはなかなかおもしろかった。

屋内での活動は、はじめは戸惑いがあったが、参加していくうちにスタッフや学生と話す機会も増え気まずさはなくなっていった。普段スキットをする機会というのはなかなかないが、スキットを通して平和とは何かということを考える方法はとても新鮮だった。それ以外にも絵を描いたり歌を歌ったりしていろいろな言葉を表現した。話す以外にもいろいろな表現のしかたがあるということを実感した。これらの表現のしかたは言語が異なる人とコミュニケーションをとる上で使える方法だと思う。

このキャンプを通して、冒頭で述べた参加のきっかけであり目標でもあった、先入観を払拭するということと、中高生の交流する姿をみるということは私の中で達成された。まず、先入観や偏見というのは本当になくなったとを感じる。韓国側のスタッフの方々とは以前会ったことがあったので、相変わらず活発的で親切だ、というかんじであったが、中国側のスタッフの方々も同じくらい親切で優しく面白い人たちだった。全てのスタッフが仲間思いでいろいろな相談にもものってくれたし、私の拙い英語にも嫌な顔ひとつせず、私は楽しく交流ができた。日本にいとどうしてもメディアや人づてに聞いた話の影響を受けて、「中国というのはこういう国」「韓国人はこういう人」というような偏見を持ってしまいがちだが、1対1で話すと一人ひとり個性があり、「こういう人」という言葉一つでくくることは絶対にできないと思う。たしかに、生活スタイルや文化はいろいろ異なりいろいろな噂はあるが、相手を受け入れる心を忘れてはならないと私は思う。相手を受け入れる気持ちさえあれば、国や言葉は違っても分かり合えるはずだ。中高生の交流する姿については、1週間で本当に変わったと思った。はじめは気まずそうであったが、だんだんと話したり遊んだりする姿が見られるようになっていった。一緒にウノをしたり卓球をしたり写真を撮ったりする様子には、見ている私も嬉しくなった。違う国の人と個人レベルで付き合っていくことが平和への第一歩になると思う。

最後に、このキャンプへの参加の機会を提供して下さり支援して下さったWFCの方々、韓国側・中国側のスタッフの方々、キャンプで出会った全ての人にお礼を言いたい。これからの人生の中で、今回体験して得たことをいかし、理解しあうことの大切さを伝えていきたいと思う。

感謝の言葉

アビー・プラットハリントン

親愛なる皆様へ

こんにちは。皆様にお別れのご挨拶をする機会がありませんでしたので、今この書面をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。私はとても素晴らしい夏を過ごしました。旅行もできましたし、バーバラ・レイノルズさんのことも学ぶ機会を得ました。彼女は日本に身を捧げられた素晴らしい女性です。彼女の話には、心を揺さぶられました。私がアメリカに戻ったときには彼女の話とうまく伝えることができたら良いなと思っております。広島と長崎で平和式典を見ることができたのがこの夏の私の最も価値のある事でした。これに増すどんな過ごし方がありましたでしょうか？それはこれからいつも私の心に生き続ける感動的な体験でした。私がこちらに来ることができた事、滞在中に手助けしてくださった事に感謝いたします。いつの日か日本に戻って来たいと思います。そしてその折には広島に、ワールドフレンドシップセンターに立ち寄りたいたと思っています。その日まで皆様に感謝の気持ちを持ち、そして世界平和をお祈りいたします。

神の祝福を



アビー、ピース・リソース・センターにて、PAXを迎える

2009年 American PAX に参加して

山根美智子 (WFC 理事)

PAX委員として、アメリカ委員会と1月頃から連絡を取り始めました。大学生は広島と長崎から一人ずつ選出でき、今までPAXに参加したことのないWFCのメンバーに、行く事を勧めてきましたが、応募者が6月になってもひとりもなく、渡辺朝香さんと私が理事会で急遽行く事に決定しました。ただし今回は、被爆者の方がいないこと、期間がいつもの3週間以上が2週間と短くなったので、果たして、インパクトがあるのか、十分にプレゼンの場があるかなど不安はありました。

簡単に旅程と出来事をお伝えします。9月8日に日本を出発して、22日に帰国と、ちょうど2週間の日程でした。まずは東海岸のヴァージニア州とワシントンDCで4日間、インディアナ州とオハイオ州で4日間、最後にオレゴン州で4日間と、アメリカ大陸横断をしてきました。アメリカが広大である事を再認識し、移動するのに時間がかかり、一ヶ所にもう少し長く留まりたいとの思いがありました。

アメリカ到着後、すぐに元館長の Don と Pauline の住む、美しい場所で知られる Shenandoah Valley で、2日間過ごしました。胃がんの手術を7月にされ、まだ体調が完全に快復されない時に、私達を受け入れ、温かくもてなしてくださったお二人に心から感謝です。一部屋は、Japanese Room と呼ばれ、全て日本のものや、広島での写真や、プレゼントに贈られたものなどがたくさん飾られていました。お二人にとって広島での生活が特別なものであった事を知り、嬉しく思いました。翌日 Bridgewater College で初めてのプレゼンを約20名の生徒の前でしました。

後の2日間は、ゆっくりワシントンDCの見学をしました。15年前に1年間だけ滞在した経験があるので、特別な愛着と懐かしさで一杯でした。特に街の様子は変わってなく、2000年に建立された全米日系米国人記念碑に行ってみました。記念碑は比較的小さく、少し探すのに手間取ってしまいましたが、二羽の鶴が有刺鉄線に巻かれているブロンズ像は痛々しく感じられました。1942年にルーズベルトの政権下で、日系人強制収容が行なわれ、収容された日系人は約12万に達したとかかかれています。ホロコーストを訪れた後だけに、キャンプでの生活がどんなものであったかと想像するだけで、胸がいたくなりました。そして1988年レーガン大統領が国の過ちを認め、日系人に対して謝罪と賠償がなされたと書いてあり、心が穏やかになりました。その時の言葉「われわれは過ちを認める。国として法の下では平等であることを断言する」と刻まれていました。

ワシントンDCからシカゴに移動し、Joel と Bev の満面の笑顔とハグで出迎えを受けました。車からのシカゴの摩天楼は、それぞれに個性豊かで、見ているだけで楽しい建築のギャラリーでした。Joel から、シカゴは1871年の大火で、ほとんど焼失した歴史を聞きながら、ジョン・ハンコック・センターにランチに連れて行っていただきました。高さは344mで、100階建てのビル、レストランはジョン・ハンコックにちなんで Signature Room と呼ばれています。独立宣言に、最初に署名をした政治家だという事です。95階のレストランから見る景色は圧巻で、下に雲海を眺め、雲の動きによって港やミシガン湖が現れ、まるで大空を飛ぶ鳥の気分でした。夕食は Evie と David の家で、Mary Ann と Charles と Joel と Bev と元の館長3組に一度に会える幸せなひと時でした。夜は Charles の家にお世話になりました。

翌朝はマンチェスター教会の礼拝に出席し、礼拝の間に、子供達に人形のシンちゃんと聖書の話をし、朝香さんがピアノを弾きながら“さくらよ”を独唱しました。礼拝の後、日曜学校の教室で全員のプレゼンがありました。その後アメリカ委員会の人たちとお昼ご飯をいただきながら、話し合いの場を持ちました。最近のWFC事情、NPOになった事、中国四川省でのピース・キャンプに中高校生を送ったこと、NARPI（北東アジア地域平和教育機関）の活動開始などを報告し、喜んでいただきました。

次の目的地、オハイオ州のウィルミントン大学へと移動しました。この大学からインターンとして Abbey が6月から3ヶ月間WFCに滞在し、バーバラ・レイノルズを良く知る人達にインタビューし、彼女の功績を記録に残すプロジェクトに関わりました。バーバラのことを知れば知るほど、平和のために貢献した偉大さと人間性に引かれ、バーバラが創立したピース・リソース・センターにまた訪れたいと思っていました。

ピース・リソース・センターに入るとすぐに、バーバラの美しい肖像画が私達を迎えてくれました。今年の8月6日に除幕式があったそうです。2008年に開設された“Stories of Hope”という常設展示に、バーバラ・レイノルズ、佐々木禎子、原爆乙女、永井隆博士の写真や遺品などが、とても分かりやすく展示されていました。長崎の関口先生が1975年にバーバラと写っている写真、山岡ミチコさんが1955年に原爆乙女としてニューヨークに治療に行った時、ホストファミリーの婦人に日本の着物を着付けしている写真など、日本で親しくしている人々の写真を見て、嬉しい気持ちと共に、このような時が本当にあったのだと少し感傷的な気分になりました。4月に韓国からの平和使節を連れて長崎を訪問した際、永井博士の如己堂を訪れ、博士の述べられた『神の摂理によって、爆弾がこの地点にもち来らされた』という意味を考えるようになっていた矢先、またこのアメリカの地で、この言葉に出会い、アメリカの人達はどうか解釈されるのか、とても興味がわいてきました。

この静かな大学街にも金融危機の影響がしっかり見られ、DHL(配達業者)が撤退した事で6000人以上の解雇者が出て、地域の深刻な社会問題になっていました。Canby Jones さんにも、4年ぶりにお会いする事ができ、お元気なお姿に嬉しさがこみ上げてきました。この方の尽力なしでは、ピース・リソース・センターの設立は不可能だったと聞いています。Jim Boland にいろいろキャンパス内を案内していただき、Canby Jones の名前が付けられた集会所があるのには、驚き、また嬉しくなりました。われわれが帰国してまもなく、88歳の誕生日を迎えられたとお聞きしました。

次にブラフトンに移動し、久しぶりにお会いするアリスとボブ・ラムザイアさんの家で夕食をご馳走になりました。すぐにプレゼンの会場となるブラフトン大学にある **The Lion and Lamb** を訪ねました。大きなライオンと子羊のぬいぐるみの出迎えを受けました。ここは、1987年に子供達に平和のビジョンを培うため、必要な技能を育てるための情報知識を提供するために設立されました。部屋の本棚には、たくさんの、児童文学書や、子供向けの美術の本がありました。ここでもプレゼンをしました。翌朝は、**Louise Matthew** が絵画展を訪れた小学3年生に絵の説明をするのを、一緒に聞きました。世界中のいろいろな場所の子供達の笑顔の絵画が印象的でした。ただし、ベトナム戦争中の絵画で、村に爆弾を落とされた絵の隣に、悲しそうな目をしたベトナムの親子の顔などもありました。大人が始める戦争で、子供達に笑顔をもたらすか、悲しい顔をもたらすかは、全て私たち大人の責任だと改めて思いました。

次に最後の目的地のオレゴン州、ポートランドに移動するために、**Dave** と **Evie** にブラフトンまで迎えに来てもらい、彼らの家に一泊し、翌日早朝にシカゴの空港まで送ってもらいました。私にとっては初めてのオレゴンで、心が高鳴りました。ポートランドの空港に、4日間お世話になるホストファミリーの **Larry Sims** が私達を出迎えてくれました。車で約1時間のドライブで、**McMinnville** のテレビ局に着きました。**Larry** の奥さんの **JoAnn** と息子の **Kyle** と合流してスタジオに入りました。リンフィールド大学の名誉教授で、**Frank Nelson** が司会を務める“**Speaking Frankly**”にゲスト・スピーカーとして4人が招かれています。日本でこの話を聞いた時は、どんな質問が出るかも予測できず、少し不安に思っていました。が、**Frank** に会った途端に払拭されました。彼の人を惹きつける人柄、優しく親しみやすいものの言い方で、すぐに打ち解けました。幸いな事に、難しい質問は、一切なくひたすらWFCの事を聞いてくださいました。28分の収録で、コマーシャルはなく、民主党が支援している番組のようでした。**Frank** は1981年に広島に来て、原爆資料館を訪れ、原爆の惨劇に驚き、われわれは、平和と調和の中で生きていかなければならないと、強調されました。それで、WFCの今までやってきた活動を、熱心に聞いてくださったのだと思います。翌日は、ご夫妻にリンフィールド大学のキャンパスを案内していただきました。今まで訪れた大学とは異なり宗派とは関係のない大学で、日本に生徒を送る **Study Abroad Program** が盛んなことが分かりました。

土曜日の夜には、**Sims** 一家が通う **First Baptist Church** でピース・コンサートが催されました。シアトルからミュージシャンのマイクとキャロル、そして友人の **Bill** が来られ、ギターとバンジョーの演奏で、次々と美しい歌声を聞かせてくださいました。朝香さんはピアノ弾き語りの独唱、私も朗読劇のグループで読んでいる林幸子さんの「ヒロシマの空」の詩を読む機会が与えられました。90人ぐらいの出席者があり、その中にテレビ番組でお会いした **Frank** の姿があり、笑顔で応えてくださいました。

Sims さん一家との4日間で、数え切れないほどの楽しい思い出ができました。太平洋の海岸を裸足で歩いた事、クラムチャウダーの美味しかったこと、満天の星を眺めながら、6人で入ったジャグジーのお風呂、Kyle が作ってくれた天ぷらの量の多さと、おいしさにびっくりなど、きりがありません。

限られた紙面では、皆さん全てのお名前を書くことができないのですが、どれだけたくさんの方が、時間とエネルギーと経済的支援をしてくださったかと思うと、感謝の気持ちで一杯です。心地よいベッドと温かいもてなしでホームステイを引き受けてくださったり、長時間のドライブでも、疲れを見せずに、常に笑顔と冗談で和ましてくださったり、食事に招いてくださったりと、数え切れません。このPAXで、アメリカの方々の惜しみなく与えてくださる友情とホスピタリティーに、深く感動して日本に帰ってきました。

心から感謝申し上げます。

ヒロシマより愛をこめて



ノース・マンチェスターの
ブレズレン教会にて、アメリ
カ委員会と共に

PAX参加者（仁後星来、
友納聖子、渡辺朝香、山根
美智子）

アメリカ委員会（Bev &
Joel Eikenberry, Liz
Bauer, Carol & Dennis
Horn, Mary Ann Albert,
Dave & Evie Bertche）

PAX in America に参加して

友納聖子

今回のPAXは私にとって発見の多い旅となりました。私はPAXに参加する前はバーバラ・レイノルズさんについてまったく知りませんでした。しかしこのPAXに参加させていただく上で彼女の活動について学ばせていただいたことと、PAXの2週間を通して、私自身の平和への関心が高まり、平和に対する姿勢も変えられていきました。

今回のPAXは教会、学校、そして地域の活動に参加させていただいて、プレゼンテーションを行いました。例年より人数が少なく、またプレゼンテーションの回数も比較的少なか

ったとお聞きしました。しかし、私としては、一度に大勢の方に伝えた時よりも、少数の中でお話しさせていただいた時の方が聞いて下さっていた方が親身になって聞いて下さっていて、より伝わったのではないかと思います。なぜなら、私たちが彼らの「ゲスト」としてではなく、「友達」としてお話しさせていただけたからだと思います。確かに一度に大勢の方にお話しすることも、もちろん平和を伝えていくためには効果があると思いますし、平和は大切であるという思いを持ってくださると思います。しかし私はそれ以上に、みんながただ平和の大切さを知るだけではなく、平和を実現していく者になりたいという思いを持ってほしいと思っていました。そのためにも、ひとり一人との出会いを大切にできたらと期待して行かせていただきましたが、本当にそのような旅になったと思います。私は今回のようにして国外で平和活動に参加させていただいたのは初めてでした。ですから、あまり比較はできませんが、私一個人としては、PAXはWorld Friendship Centerのネットワークが根付かれているからこそ、それぞれの場所での滞在期間は短かったものの深い交わりの時間が持つことができ、みなさんのゲストではなくみなさんの友達になれたのだと思います。これはこのPAXのととても良い特徴だと思いました。このようにして平和を実現する上で励ましあえる仲間と出会えたことにも感謝しています。

この旅の私のプレゼンテーションの内容として、外国人被爆者というテーマを選ばせていただきました。私の予想通り、聞かれていた方々の中に被爆者は日本人だけではないということをご存じでない方がたくさんおられました。10分という短い時間の中で言いたいことすべてを述べることはできませんでしたが、何かしら彼らに刺激を与えられていたら嬉しいと思います。

今回のPAXは平和についてだけでなく、国際問題や文化についてお話しさせていただくチャンスも与えられたので、さまざまな意味で実に実り多いものでしたが、私としては、もっと学生たちと交わる時間があり、ディスカッションさせていただく時間があつたらより良い旅になったのではないかと思います。しかし、本当に多くの人たちのサポートにより未熟な私たちを用いて下さり、参加させただけでよかった広島の世界友好センターの皆様をはじめ、アメリカでお世話になった方ひとり一人に心から感謝しています。ありがとうございます。これからそれぞれにできる活動は違いますが、微力であっても無力では

ないことを信じて、一歩ずつ核兵器が消える素敵な世界になってほしいと思います。本当にありがとうございました。

オハイオ州ウィルミントン高校にて



アメリカンPAX2009

広島修道大学 仁後星来

私はこのたび、広島修道大学国際交流センターの紹介で、このプログラムに参加させていただきました。今回のプログラムで初めてWFCのことを知り、はじめは何も分からないような状態でした。アメリカでは、大学訪問やテレビ取材、パネルディスカッション、そして教会にも行かせて頂き、合計で10回ほどプレゼンテーションをしました。

その中でも、特に印象深かったのがウィルミントンカレッジでの活動です。ウィルミンントンの町自体はまだ共和党の人が多いとの話は聞いていましたが、カレッジでは平和のために一生懸命活動しているスタッフの方や、学生がたくさんいたことに感激しました。特にウィルミントンカレッジには、WFCの創設者でもあるバーバラ・レイノルズさんが設立されたピースリソースセンターがあることによって多くの学生が平和に対して強い意識を持っているということを感じ取れました。というのも、私たちがカレッジのあるクラスを訪問したとき、ほぼすべての学生が必ず1回はセンターに行ったことがあると言っていました。さらに、お昼の時間に、ある一室を借りて平和についてプレゼンテーションしたときも、多くの学生が足を運び、そして来てくれた学生達はみんな、ノートとペンを片手にメモを取りながら真剣に聞いてくれていました。

また、私たちがブラフトン大学を訪問し、プレゼンテーションをしたときには、ピースクラブという団体があり学生も多くいました。発表のあとに、そこにいた学生達のほとんどが私たちのところにきて、たくさんの質問があったことには驚きました。ウィルミントンカレッジだけでなく、ブラフトン大学、そしてリンフィールドカレッジでも私と同じ世代の人達が、このように興味を持って学び、理解してくれようとしている姿にとっても感動しました。現在、唯一原爆を落とされたことのある広島に住んでいるにも関わらず、多くの学生は平和に対してあまり興味・関心を持たず、何の活動もしないまま過ごしています。しかし、やはりこれからは若い世代の人達がもっと平和について学び、行動していかなければならないと思いました。

私は、プログラムに参加する前から平和に対して興味はありましたが、このプログラムを終えた今、感じるものが変わりました。平和に関するプレゼンテーションを何回もやっていくうちに、改めて核兵器の恐ろしさを痛感し、平和の大切さを感じました。今私は、被爆三世であることに誇りを持っています。なぜなら、祖母から実体験を直接聞くことができ、よりダイレクトに第三者に被爆体験を伝えることができるからです。そして今回新たに気づいたことがあります。それは、被爆体験を通して平和について第三者に伝えるとき、決して感情のままに話していけないということです。感情のままに話してしまうと、どう

しても責めているような口調になってしまうような気がします。「アメリカが原爆を落とす
て多くの人を殺した。だからアメリカが悪いのだ。」このようなニュアンスで受けとられて
しまう可能性があります。このように言われてしまったら、誰でもいい気はしませんし、
聞くに気にもならないかもしれません。これは私のプレゼンテーションの中にもあったこ
となのですが、確かに広島・長崎への原爆投下は許しがたいことかもしれません。しかし
一方で、日本も韓国や中国に侵略し、日本で強制的に労働させてきました。韓国や中国の
人達からしてみれば、日本だって許しがたい国になります。だから今、私たちに必要な
のは、責めたり言い合ったりすることではなく、お互いを理解することだと思います。ただ、
やはり実際に原爆を体験し、実の家族を奪われ、長年放射能の恐怖にさらされてきた世代
の方々にとっては難しいことだと思います。もし私が同じ立場だったら、客観的に伝えて
いくことなどできないと思います。しかし今の私の、この被爆三世という立場は相互理解
の架け橋となり、平和な社会を築いていくために、とてもいい立場だと思います。祖母
から聞いた話を一度自分の中で整理し、そして自分の考えも取り入れながら他者に伝えら
れます。今回プログラムを遂行していく中で、私が身をもって体験できたことです。

それからまた、このプログラムで良い経験となったのが、いろんな世代の多くの方々との
意見交換です。アメリカ滞在中はずっとホームステイをさせて頂きましたが、移動回数
が多かったため、二日に一度はホストがかわっていました。毎日のパッキングはすこし大変
でしたが、おかげで毎晩いろいろなことを各家庭で話すことができ、それまで知らなかつ
たことも聞く機会がたくさんありました。また、ホストファミリーとの会話だけではなく、
アメリカ委員会の報告会や、各大学のクラスへの訪問を通じても得るものは多くありまし
た。アメリカ委員会の報告会の中では、「これから先、より多くの若者を平和活動へ引き込
むためにはどうしたらいいか。」「あなたは平和活動に興味があるか。これからどうしてい
きたいか。」という質問も投げかけられ、私自身が平和に対してどう思っているのかを改め
て考える機会となりました。そして最後に、今回このプログラムのために協力してくださ
った全ての方々に心より感謝いたします。アメリカにいる間、どのホームステイ先でもど
の大学の訪問先でも、すべての人がとても親切で、優しさに溢れていました。朝早くから
空港まで送って下さったり、一時間以上も空港で待って下さっていたり、長距離移動にも
関わらず私たちを次の目的地まで連れて行ってくださったりと、感謝してもしきれないほ
どたくさんのごことを頂きました。また、何ヶ月も前からプログラムの計画や打ち合わ
せをして下さったWFCのPAX委員の方々にも感謝しています。このプログラムを通し
て、平和についてはもちろん、それ以外にも本当にたくさんのごことを感じ、学ばせて頂き
ました。今回のこの体験を、少しでも多くの人達に伝えていけるよう、努力していこうと
思います。



オハイオ州、ブラフトン大学の Louise Matthews と共に

2009 アメリカ PAX に参加して

渡辺朝香

2001年私はWFC主催のドイツPAXに参加した。そして今回の2009年アメリカPAXへの参加は私の中でとぎれることなく、「うた」を歌うという行動でつながっている。ヒロシマで出合った「うた」(詩)には、ひとつひとつの「いのち」の風景が描かれていて、歌うものに対しての問いかけがあった。その問いかけにどのように応答できるのか？それが私へ与えられたPAXからの宿題だった。その宿題のひとつに応答する形を今、私は考えている。

- ・日時 11月28日～29日
- ・場所 広島市臨海少年自然の家（ヒロシマ平和映画祭共催）
（元陸軍検疫所跡地、原爆投下後は臨時野戦病院となる）
- ・テーマ 生命の詩（うた）を奏でる＝シマジマ（島々）をめぐる映像・うた・身体

1945年8月6日原爆投下により多くの「いのちの灯火」がこの似の島の地でも消えていきました。「いのち」とは・・・消された「いのち」忘れてはいけない。「いのち」のいたみを映像・うた・身体・・・とさまざまな角度から・・・その「いのち」からの声に応答したいと思う。最後になりましたが、PAXに参加することにより多くの新たな出会いとエネルギーをいただきました。アメリカ滞在中は山根美智子さんの通訳、感謝でした。PAX準備にあたってくださったWFCのスタッフ、アメリカでのPAXを応援してくださったアメリカの皆様にご心よりお礼申し上げます。